

大学生による地域活動の効果
— 常若のしずくプロジェクトの事例から —

藤 井 恭 子

The Effects of Community Activities on University Students:
The Case Study of the Eternal Spirits Project

Kyoko FUJII

皇學館大学現代日本社会学部

日本学論叢 第12号

令和4年3月

大学生による地域活動の効果

— 常若のしずくプロジェクトの事例から —

藤 井 恭 子

抄録 ●

本論文の目的は、常若のしずくプロジェクトの事例から大学生が主体的に取り組む地域活動に関する知見や今後の展開を明らかにすることである。本プロジェクトは伊賀市の米農家および日本酒の蔵元との連携事業であり、2016年度から継続的に実施している。目的は、商品企画・開発・販売・PRによる三重県の特産品の伊賀酒や日本酒全般の普及、そして生産地域の活性化で、その活動内容は、①酒米農家および日本酒の生産者へのヒアリング調査ならびにデータや資料の分析による日本酒の現状把握と課題の創出、②酒米作り・酒造り体験による日本酒の魅力再発見、③PRポスターやPR動画の作成、④伊賀酒「常若のしずく」の商品開発と販売である。

常若のしずくプロジェクトの事例を考察することにより、学生が地域活動に参加することで地域へのコミットメントや地域活性化への貢献意識にも変化が見られるようになったなど、様々な知見が得られた。

Key words : 地域活性化, 地域活動, 大学生, 常若のしずくプロジェクト

1. 本論文の目的

本論文の目的は、常若のしずくプロジェクトの事例から、大学生が主体的に取り組む地域社会活動に関する知見や今後の展開を明らかにすることである。

本プロジェクトは伊賀市の米農家および日本酒の蔵元との連携事業であり、2015年度から継続的に実施している（酒米の田植えや日本酒の仕込みは2016年度から実施）。目的は、①生産への参加・商品企画・販売・PRによる三重県の特産品の伊賀酒や日本酒全般の普及、②生産地域の活性化、③主体的に参加

することによる学生の学びの深化、④実践的、汎用的な能力の獲得、である。また活動内容は、①酒米農家および日本酒の生産者へのヒアリング調査ならびにデータや資料の分析による日本酒の現状把握と課題の創出、②酒米作り・酒造り体験による日本酒の魅力再発見、③伊賀酒「常若のしずく」の商品開発と販売、PRである。現在三重県は人口減少傾向で、地域の担い手も減少しており、本プロジェクトはこうした問題を解決する一助になるものとして期待されている。

2. 先行研究の検討

大学生の地域活動については、水野（2013）、山本（2015）、久保（2017）、白石・櫻井・中村（2018, 2019）、大東（2021）などが研究対象として論じている。そのなかでも、中塚・小田切（2016）は、「主体の専門性」と「地域の当事者意識」の二軸から、大学における地域連携の取組を「交流型」、「価値発見型」、「課題解決実践型」、「知識提供型」の4つの型に分類している。またそれぞれの型の生成・流動についても論じている。すなわち、地域資本として蓄積されたものをマッチングさせることで「交流型」や「価値発見型」の活動が生まれ、それを一歩進ませて「課題解決実践型」や「知識共有型」の活動が発展するし、その活動によるエンパワーメントから新しい人材や組織変革、能力や知識の獲得が起り、新しい地域資本として蓄積していくのである。地域連携の取組でとりわけ重要なのは地域の能力や資本の豊かさであり、この循環モデルを回すのが地域コーディネーターとしている。そして小田切は、役割大学の体制として連携活動促進させる課題として（1）ハードとソフトの「インフラ」の整備、（2）大学における積極的な位置づけの二つを取り上げている（小田切 2016：11）。

以上から、特に小田切の先行研究を踏まえつつ「常若のしずくプロジェクト」の事例を見ていく。

3. 大学生による地域活動の事例

— 皇學館大学における「常若のしづくプロジェクト」 —

(1) 研究方法・研究内容

研究方法は、参与観察による事例分析である。本研究では米作り・酒造り体験、PR ポスターやPR 動画の作成、伊賀酒「常若のしづく」の商品開発と販売といった活動についての参与観察をおこなった。

(2) 伊賀市について

まず「常若のしづくプロジェクト」に関わる伊賀市についてである。伊賀市は三重県北西部に位置しており、滋賀県、京都府、奈良県と接し、また近畿圏、中部圏の2大都市圏の中間地点にある。京都・奈良や伊勢を結ぶ大和街道や伊賀街道、初瀬街道があり、古来、飛鳥、奈良、京都などの都に隣接する地域として、また江戸時代には藤堂家の城下町や伊勢神宮への参拝者の宿場町として栄えてきた。さらに、伊賀流忍者や松尾芭蕉、横光利一のふるさととして、また吉田兼好ゆかりの地として広く知られている。

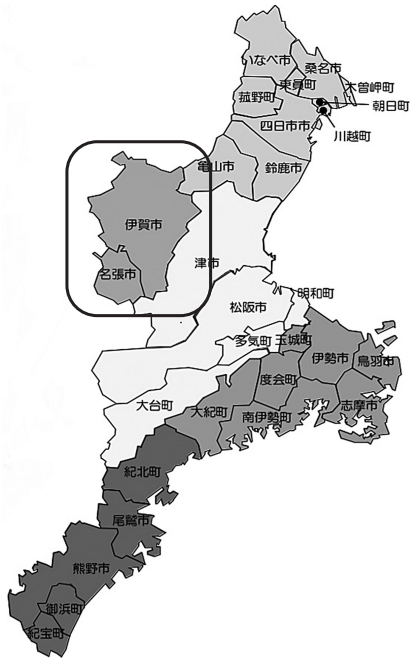


図1 伊賀市の位置

2021年3月31日現在で、伊賀市の人口は89,262人、世帯数は40,706世帯となっている。森林が全体の約62%、農用地が約14%、宅地は約5%と、自然豊かな地域であり、特産品は伊賀米や伊賀牛、伊賀焼などが有名である。また、皇學館大学は2011年まで名張に学舎があったため、伊賀市とも深い関わりがある。

(3) 常若のしずくプロジェクトについて

次に「常若のしずくプロジェクト」についてである。このプロジェクトは、皇學館大学地域社会研究会（以下、地域社会研究会）によって進められている。2010年3月に設立され、学生メンバーが実際に地域に行き、地域の抱える問題を自分自身で確かめ、様々な取り組みを行うことで問題を解決していくことを目的としている。学生は主体的に参加することで地域社会についての学びを実践的に深めている。



図2 常若のしずく

「常若のしずくプロジェクト」は地域社会研究会と伊賀市にある米農家および日本酒の蔵元との連携事業で、今年度で7年目になる。その目的は、①米所でもある伊賀市で生産されている酒米「神の穂」やその酒米を使用した日本酒の生産に携わったり、商品企画・販売・PRに参加したりすることで日本酒についての理解を深めること、②伊賀酒ならびに日本酒を広く普及し、③地域を活性化させること、そして④座学だけでは学ぶことのできない実践的、汎用的な力を学生が習得すること、となっている。

「常若のしずく」は、皇學館大学地域社会研究会のメンバーの熱意、そして卒業生や伊賀地域の方々の温かな支援による「汗と涙の結晶」である。「常若のしずく」というネーミングは大田酒造と学生たちとの話し合いで決まった。「常若」は二十年に一度神殿を新造して神々を遷すという「年式遷宮」、引いては皇學館大学に大きく関わる「伊勢神宮」をイメージさせる言葉ではあるが、地域社会研究会の学生は四年に一度入れ替わることから「学生」そのものもイメージさせる言葉として用いた。また「しずく」はもともと漢字表記だったが、あえて平仮名にした。それは、①原酒を搾ることのできる日本酒の「しずく」、②農作業や日本酒造りの際に流した汗の「しずく」、③プロジェクトがうまく進まず流した、くやし悲し涙の「しずく」、④苦勞に苦勞を重ねてようやく完成し、祝賀会で皆様の支援に感謝しつつ流した、嬉し涙の「しずく」といったさまざまな「しずく」を表現しているためである。なお、「常若のしずく」の

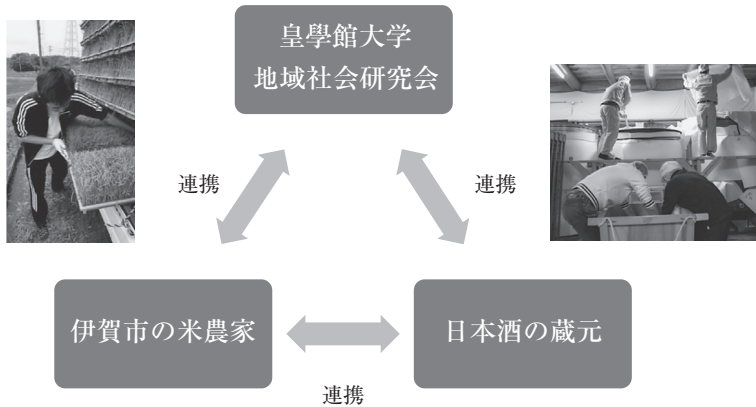


図3 大学・米農家・蔵元の相關図

書体をあえてか細いものにしたのも、さらにラベルの色を青色にしたのも、学生のイメージに合わせたためである。

ラベルや菰の字とデザインについては、卒業生で書家の伊藤潤一氏に相談して無償の協力を得た。また不思議なご縁ではあるが、この「常若のしずく」は伊勢志摩サミットで各国首脳を伊賀酒で舌を楽しませた大田酒造、また書道で目を楽しませた伊藤潤一氏の両者がコラボしたものとなった。

祝賀会での鏡割りの樽にもエピソードがある。樽は必要であったものの、非常に高額で全く手が届かない状態だった。困り果てていたところ、本学教員の関係者からの温かな支援があり、なんとか樽を得ることができた。そして学生が試行錯誤しながら菰づくりに励んだ結果、何とか2016年3月の卒業祝賀会に間に合ったのである。

このように「常若のしずく」ができあがるまでにはさまざまな困難があったものの、周囲の人々の温かい支援で乗り越え、現在でも継続している¹⁾。

その後も含めた実施内容については、以下の通りとなっている。

○2015年度：参加学生3名，教員2名

10月 プロジェクト開始

11月～3月 酒米が「神の穂」に，米農家が伊賀市の米農家に，蔵元が「大田酒造」に決定

○2016年度：参加学生4名，教員2名

4月 酒米「神の穂」の田植えに参加

11月 銘柄が「常若のしずく」に決まる

2月 「常若のしずく」の仕込みに参加

3月 大学の祝賀会で「常若のしずく」を披露

○2017年度：参加学生2名，教職員3名

4月 酒米「神の穂」の田植えに参加

5月 「常若のしずく」販売が開始

12月 「常若のしずく」の仕込みに参加

2月 「常若のしずく」の仕込みに参加

「全国まちづくりカレッジ in 伊勢」で販売

3月 大学の祝賀会で新酒の「常若のしずく」を披露

○2018年度：参加学生4名，教職員3名

4月 酒米「神の穂」の田植えに参加

12月 「常若のしずく」の仕込みに参加

12月 新しいパッケージを作成

1月 新バージョンのチラシ作成・完成
三重県外でも販売

2月 「常若のしずく」の仕込みに参加

3月 新しいパッケージ完成

大学の祝賀会で新酒の「常若のしずく」を披露



図4 仕込みの様子

○2019年度：参加学生2名，教職員3名

4月 酒米「神の穂」の田植えに参加

12月 「常若のしずく」の仕込みに参加

1月～2月

小瓶バージョンのデザインを作成・決定

2月 「常若のしずく」の仕込みに参加

3月 大学の祝賀会で新酒の「常若のしずく」

を披露・小瓶バージョンを販売



図5 小瓶バージョンのデザイン案

○2020年度：参加学生2名，教職員3名

新型コロナウイルスの影響で実施できず

○2021年度：参加学生3名，教職員3名

4月 酒米「神の穂」の田植えに参加だったが，天候不順で参加できず

12月 「常若のしずく」の仕込みに参加

4. 考察

「常若のしずくプロジェクト」の事例を考察すると，小田切のいう「交流型」，「価値発見型」，「課題解決実践型」，「知識共有型」の4つのパターンのすべてが当てはまった。すなわち，本プロジェクトの学生メンバーと伊賀の米農家や蔵元，販売場面での人々が交流しているため「交流型」の側面が，また学生メンバーは，三重県の特産品である伊賀酒の商品企画・開発・販売・PRの実践活動を通して三重県の特産品の伊賀酒や日本酒の魅力を知るようになったため「価値発見型」の側面があったといえる。また，学生メンバーが「少しでも多くの人，特に日本酒離れをしている若者に美味しい伊賀酒や日本酒の魅力を知って日常でも楽しんでもらえるよう，さらにはこの活動を通して地域活性化に貢献できるよう，今後も挑戦していきたい」と述べており，日本酒離れが見られ，蔵元が減っている現状を学生メンバーが知ったことで，その改善に向けて活動に励んでいる姿が見られたため「課題解決実践型」の側面があるといえ

る。さらに、プロジェクトの例会などを通して、学生メンバーや教員が得た知識をお互いに共有することもあったため「知識共有型」の側面もあった。

新しい人材や組織変革、能力や知識の獲得については、「常若のしずくプロジェクト」においても実際に起こっていた。ただし、「常若のしずくプロジェクト」は長期に渡って実施されているプロジェクトではあるものの、在学期間の関係で学生メンバーは入れ替わっているため、新しい地域資本を蓄積してはいるものの、次の学生メンバーへの伝承に課題があった。また、小田切は循環モデルを回すのが地域コーディネーターであるとしていたが、「常若のしずくプロジェクト」ではプロジェクトリーダーや教員がその役割を担っており、その点が異なっていた。

5. 今後の展開

今後の研究の展開としては、①今後も継続的にデータを得て、詳細に分析を行なうこと、②本論文では「常若のしずく」プロジェクトの活動を通じて大学生が取り組む地域社会活動の知見を検討したが、それとは別で実施している三重県度会町との連携活動「度会カフェリョクプロジェクト」の事例と比較することでさらなる知見を得ること、③地域と大学が連携した地域づくりが成功するための新たな知見を引き続き見出していきたい。

また今後の活動の展開としては、①参加学生を増やし、持続可能な事業展開を行いつつ、活動で得た地域資本を次の学生メンバーに伝えていくこと、②また「常若のしずく」の認知度を高めることや「常若のしずく」を活用した商品開発の可能性を模索し、企業を含めた産官学連携に向けた取り組みをさらに推進していきたい。さらに、③持続可能な開発目標 SDGs を踏まえた事業を推進することを重点課題とする。

【註】

- 1 昨年度はコロナ禍ということで一時停止してはいるものの、今年度も実施している。

【引用・参考文献, URL】

- ・伊賀市について <https://www.city.iga.lg.jp/> (2021年4月1日閲覧)
- ・大東貢生, 2020「学校を中心とした地域活性化の可能性について—南丹市美山町でのコミュニティ・スクールの展開から—」『佛教大学総合研究所紀要』(27), 65–78.
- ・同上, 2021「授業での学生の活動が地域社会に与える影響について—受け入れ団体の語りから—」, 『佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集』(8), 83–96.
- ・大東貢生・長光太志・全炳昊・大窪善人・牧野芳子・徳井公樹, 2021「大学と地域・企業の連携による教育とは?—大学間連携共同教育推進事業プログラムの概要—」『佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集』(8), 1–13.
- ・久保友美, 2017「大学間連携による地域公共人材育成: 先端的京都モデル「地域公共政策士」の現状と課題」『龍谷政策学論集』6 (1・2), 51–61.
- ・皇學館大学教育開発センター, 2019『皇學館大学 CLL 活動』.
- ・白石克孝・櫻井あかね・中村保ノ佳, 2018「龍谷大学政策学部による域学連携の取り組み (上): 兵庫県洲本市を事例に」『龍谷政策学論集』(7), 137–150.
- ・同上, 2019「龍谷大学政策学部による域学連携の取り組み (下): 兵庫県洲本市を事例に」『龍谷政策学論集』(8), 29–46.
- ・谷村要, 2017「地域とかわる PBL への試み~京丹後市域学連携事業での活動を事例として~」『大手前大学 CELL 教育論集』7, 31–37.
- ・中塚雅也, 小田切徳美, 2016「大学地域連携の実態と課題」『農村計画学会誌』35 (1), 6–11.
- ・中村保ノ佳, 2017「洲本市と龍谷大学の域学連携型アプローチによる地域振興の考察: 再生可能エネルギーを柱にした事業展開について」『龍谷大学大学院政策学研究』(6), 93–116.
- ・長田進, 2015「地域貢献について大学が果たす役割についての一考察」『慶応義塾大学日吉紀要 社会科学』(26), 17–28.
- ・早川公, 2017「地域に期待される「大学の役割」とは何か: 「地域志向教育」

のあり様をめぐって（課題先進地における地方創生への挑戦）」『地域活性学会研究大会論文集』（9），306-309.

- ・藤井恭子，2015『社会情報と人づくり』皇學館大学出版部.
- ・水野晶夫，2013「「地域が学生を育て，学生が地域を元気にする」地域連携活動の試み：名古屋学院大学の事例から」『大学教育と情報』2013年度（2），12-15.
- ・文部科学省，2018『コミュニティ・スクール2018～地域とともにある学校づくりを目指して～』.
- ・山本早苗，2015「域学連携による地域づくりの現状と課題：「ふじとこ伊豆プロジェクト」の取り組み」『常葉大学社会環境学部研究紀要』（2），31-47.
- ・遊佐順和，2015「高等教育機関による地域力の創出に関する研究：北海道離島地域における人材育成を事例として」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』（123），99-117.
- ・Kyoko Fujii, Educational Effects of Community Activities at Universities : The Case of Watarai Cafe Ryoku Project, International Sociological Association IV ISA Forum of Sociology, 2021.

The Effects of Community Activities on University Students: The Case Study of the Eternal Spirits Project

Kyoko FUJII

Summary

The purpose of this report is to clarify the knowledge and future development of community activities that university students are actively involved in from the case of the Eternal Spirits Project. This project is a collaborative project with rice farmers and sake breweries in Iga City, and has been ongoing since 2016. The purpose of the project is to spread Iga sake and Japanese sake, which are local specialties of Mie Prefecture, through product planning, development, sales and PR activities, and to revitalize production areas. The activities are (1) to grasp the current situation of sake and to find out the causes of problems by conducting interviews with sake rice farmers and sake producers and analyzing data and materials, (2) to rediscover the attractiveness of sake through sake rice-making and sake brewing experiences, (3) to create PR posters and videos, and (4) to develop and sell products for Iga sake, "Eternal Spirits".

By examining the case of the Eternal Spirits Project and the attitudes of the participating students, various findings were obtained, such as the change in the sense of commitment to the community and contribution to regional revitalization by the students' participation in regional activities.

Key Words : Community Revitalization, Community Activities,
University Students, Eternal Spirits Project

